

# 図書だより

第50号  
平成23年3月1日  
呉工業高等専門学校  
教育センター図書館  
<http://www.lib.kure-nct.ac.jp>



東広島・呉自動車道阿賀IC



阿賀虹村線



阿賀マリノ大橋

## 変わりゆく呉高専界限



呉高専前交差点

### 目次

・ 巻頭文 変化を加速し、変化を楽しもう	.....	図書館長 笠井 聖二	2
・ 第7回校内読書感想文コンクール			
最優秀賞			
「利休にたずねよ」(山本兼一 著)	.....	E 1 立畠 彰太	3
「天使の卵」(村山由佳 著)	.....	C 2 大迫 拓馬	4
「嘘つきアーニャの真っ赤な真実」(米原万里 著)	.....	M 3 小西 孝洋	5
優秀賞			
1年生の部 M 中村 和真 E 真砂 小春 E 一瀬 直人 C 下鍛冶 大樹	.....		6
2年生の部 M 埴本 優樹 C 伊藤 雄貴 C 藤井 亜希 A 麻村 晶子	.....		8
3年生の部 M 川光 裕士 E 殿島 唯史 C 花岡 和 A 川頭 あずさ	.....		11
4・5年生及び専攻科生の部 (該当なし)			
・ コラム 変わりゆく呉高専界限	.....		14
・ 留学生在紹介する外国の図書館			
ニューデリー公共図書館	.....	E 3 モヘット	15
ラオス国立大学中央図書館(NUOL 図書館)	.....	A 3 スッサダー	15
・ 行事報告 平成22年度ブックハンティング	.....	学生会文化委員長 小林 香菜	16
		環境都市工学科2年 尾道 聖子	17
・ 新任教員の随想			
文学書のすすめ	.....	人文科学系分野 外村 彰	18
二人の作家	.....	人文科学系分野 富村 憲貴	19
技術書の儂(はかな)さ	.....	自然科学系分野 山田 宏	20
私の読書	.....	自然科学系分野 影山 優	21
読書が十代から好きだったら	.....	電気情報工学分野 梶原 和範	22
こころの洗濯のススメ	.....	電気情報工学分野 平野 旭	23
・ 私の推薦図書	.....		24
「スティーブ・ジョブズ 驚異のプレゼン」, 「バイオプラスチック材料のすべて」, 「コンクリートを巡る旅」			
・ お知らせ	.....	図書館	25
平成21年度 図書館利用状況			
図書貸し出し回数上位10, DVD利用回数上位10			
・ 編集後記	.....	図書館	26

## 巻頭文

## 変化を加速し、変化を楽しもう

図書館長 笠井 聖二



前回の「図書だより」を出して、早一年になります。前回の巻頭言は「図書館も変わっています」というタイトルでした。この1年間で、図書館は更にどのように変わったでしょうか。

施設の大きな変化はありませんが、新たに学会誌を展示するようにしました。本校の多くの先生方は、「土木学会」、「物理学会」などの学術関係の学会に入っています。各学会では、学会誌を発行しており、最新の研究動向やトピックス、初学者向けの解説記事などがあり、その分野の活動を知るには最適な書籍です。

しかし、学生諸君や、企業の技術者の方々は、なかなか、学会誌に触れる機会がありません。

そこで、図書館が、不要になった学会誌を収集し、展示する活動を始めました。学内の先生方から学会誌を寄贈して頂き、学会の許諾を確認した後、展示しています。現在まで、23学会の約1,400冊の学会誌を収集・展示しています。これからも、増やしていく予定です。昨年度増設された新閲覧室に展示していますので、是非、利用してください。

「図書館の変化」ということでは、昨年7月頃にインターネットニュースに『スタンフォード大学の新しい図書館「本」が激減』という記事がありました。

(<http://news.livedoor.com/article/detail/4882553/>)

「本」が減った理由は、「図書の予算が減った」という、よく耳にするものではなく、本のデジタル化を進め図書館の機能を大きく変えていこうという積極的な理由によるものです。このニュースの最後の部分を引用します。

『本の冊数を減らして、物理的にあいたスペースで他のサービスを展開するのも図書司書さんたちは楽しみにしているようです。ワークショップや生徒達との交流等。図書館という場所は今、変化のまっただ中にあるようです。』

スタンフォード大学とは規模や方法は違いますが、私たちが同じような方向を目指しています。学会誌の活動も、その一環です。今は、学会誌という物を、図書館という場所に展示しているだけですが、目指しているのは、学会誌を媒体とした新しいサービスの提供なのです。

実は、図書館でも、iPadを購入しました。まずは、本校の図書館を初めて利用する方へのガイダンス用を考えていますが、新しいサービスへの展開を見据えています。また、本校教職員・学生の研究成果を広く公開し活用してもらうために、学術機関リポジトリという活動も始めました。

このように、図書館では、いろいろな取り組みを始めています。まだ、ひとつひとつが始まったばかりでバラバラの状態ですが、今後、これらが有機的に連動し、新しい機能を生み出すことを期待しています。図書館は、「知の活動拠点」としての新しい役割を担うことを目指して、静かに・ゆっくりですが、変化しようとしています。

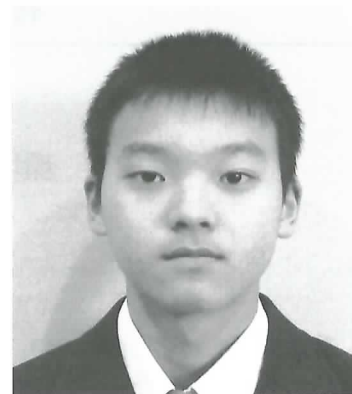
上記のニュース引用に「図書司書さんたちは楽しみにしている」とあります。私たちが、変化を楽しみにしています。そして、利用者の皆さんも、この変化と一緒に楽しんでもらいたいと思います。

## 第7回 校内読書感想文コンクール最優秀賞

1年生の部

## 利休にたずねよ

山本 兼一 著



電気情報工学科 立 昌 彰 太

人は皆、欲望を持って生きている。また、その欲望が満たされると、また新たな欲望が生まれる。

「利休めにとっては、命より、茶が大事でござる」

利休の茶の湯に対する美への欲望は極地だと感じた。その静かで落ち着いた姿からは想像できないほどの熱い思いを内に秘めていたのだ。茶への思い、高麗の女への思い…

利休が十九歳のときに経験した悲恋が利休の美意識の核になったのだ。その経験があったからこそ、一畳半の茶室などをつくりだした。恋とは自分の人生を大きくかえるものなのだろうか。自分は経験したことがないのでその答えはわからない。

利休の芸術・美の世界は万人を感服させる素晴らしいものであった。茶の湯の手際の良さ、美への価値観、どれをとっても他の茶人とは比べものにならなかった。まさに茶頭の名がふさわしかった。しかし、利休自身は意識していなかったにしても、傲慢な態度、上から目線な態度をまわりの人が意識し始めてしまっていた。こうして下からのぼりつめてきた利休を見て、天下人豊臣秀吉の利休に対する信頼は恐怖や嫉妬故に、しだいに苛立ちへと変わり、最後には切腹を命じるのだ。秀吉は利休にわびさえすれば許すと何度も伝えたが利休はわびなかった。利休のプライドの強さがうかがえる。

「悔しいが、ただ者でないことは認めねばなるまい。あの男は、こと美しさに関することなら、誤りを犯さない。それゆえによけい腹立たしい」

秀吉の利休に対する苛立ちや嫉妬の気持ちや態度が作品の中では多く見られる。皆も嫉妬や苛立ちの念を抱いたことがあるだろう。

中学校時代、自分も一生懸命勉強をしているのに、まわりの人に抜かされて、差をつけられていった。何もかもが嫌になり、投げ出したくなった。しかし皆に追いつきたいという欲望が頑張る糧となり少しずつでも成長することができた。

結局欲望とは見方、考え方しだいで自らを高みに持っていく糧ともなるし、自らを破滅させる武器ともなるのだ。

仏法には三毒の焰があるとこの作品に出ている。人が道を誤るのはこの三毒の焰に焼かれてしまうからだという。自分が犯してしまった過去の恥も三毒の焰で説明がついた。この場面を読んだ瞬間僕はとても戒められた。

この作品には、秀吉と利休、力と美、政治と芸術の対立がとてもわかりやすく描かれていた。戦国時代を、茶道を、千利休をよく知らない僕ですら、物語のなかに入り込むことができた。

利休のようになにか一つのことにこだわりを持って生きることは大切だと思う。

この作品を読み終えたとき、僕の頭の中に様々な思いが流れ星のように浮かんで消えた。これから自分はどうのように生きてゆくのだろう。もう一度自分に質問してみようと思う。

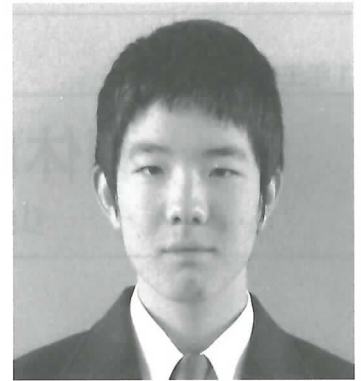


## 2年生の部

## 天使の卵

村山 由佳 著

環境都市工学科 大迫 拓馬



私は高専に入学したものの、その先どうするかと問われても答えられない。入試の面接では父が土木の仕事をしているので、父の仕事をしている姿に憧れとカッコよさを感じ、自分もそうなりたと言った。でも、父がどんな仕事をしているのか私は知らないし、毎日朝六時に出勤し、大雨でも現場に向かう父に尊敬はするものの自分は果してそんな仕事出来るのだろうかとも思う。将来の明確なプロセスもないまま高専に入学して、目的もないまま就職しても大丈夫なのだろうかと模索している時にこの本に出会った。

この本は、大学受験に失敗した主人公歩太が、予備校に行く途中に見かけた春妃に一目惚れする所から始まる。ただ春妃の凛とした横顔の裏にはフィアンセが発狂死した過去を持っていた。また、歩太も幼い頃に父が発狂、その病院で出会ったのは、父の担当医として現れた春妃だった。同じ境遇の二人がお互い支えあっていくことで困難に立ち向かっていく中での純愛や人間模様が書かれた作品である。

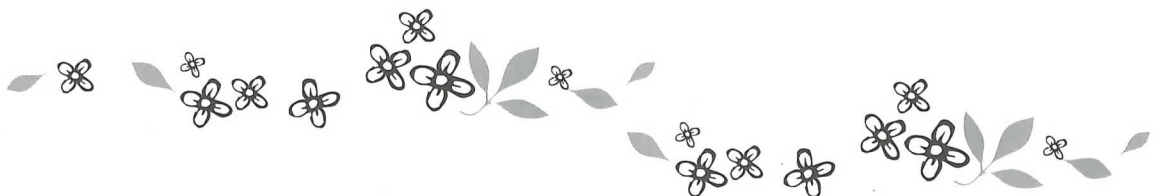
この物語の主人公も将来について考えた。好きな絵を続けたいものの、明確にその後どうするか分からない。美大をもう一度受験して受かったとしても絵描きやデザイン系の仕事に就ける人間は限られている。普通の仕事に就くようになるんだったら普通大学で良いんじゃないだろうか。いや、それなら大学に行かず就職すれば良いじゃないかと堂々めぐりを繰り返していた。そんな歩太に春妃が放った一言がある。

「もっとがむしゃらに、自分勝手になりなさい。冷静でものわりの良い人間になるのはおやめなさい。」

この言葉は私の心の中に重くのしかかってきた。結局、私も歩太も先の事をカッコよく考えるフリをして現実から逃げているだけだった。私は小さい頃から班長や委員長などのリーダー役割の仕事をする事が多かったし周りからは明るい子だから、誰とでも仲良く出来てすごいとも言われた。でも、私は人との争いを避ける事が多かった。自分がいじめられるのが嫌だからいじめを見てもただ見て見ぬフリだった。内申にひびくからとか、親に迷惑かけるとか何かと理由をつけて、人に何を言われてもケンカしなかったし、謝ればまるくおさまると子供のくせに大人みたいな事を思っていた。確かに周りから見たら、しっかりした考えを持った大人な子供なのかもしれない。でも、自分にウソを付きながら感情を抑えて我慢して生きてきたことは自分が一番分かっている。春妃は歩太にやりたいようにやれと言いたかったのではないだろうか。その後、歩太はがむしゃらに勉強して美大に見事合格している。

現実から逃げなかった結果が形になったのである。

今の私に十年後私自身がどうなっているかなんて分からない。分からないからこそ現実から逃げてはならない。今逃げたらずっと逃げ続けてしまう。勉強や人間関係という壁が立ちただかっても、逃避という名の脇道に逃げるんじゃなくて壁にぶち当たっていこうと思う。それを乗り越えた時に初めて本当にやりたい事が見つかる気がする。それがどんな道かは今の私には分からない。しかし、どんな道であろうとも現実から逃げずにガムシャラに生きていきたい。



## 3年生の部

## 嘘つきアーニヤの真っ赤な真実

米原 万里 著



機械工学科 小西 孝 洋

国民とは何？民族とは何？はっきり言って人とは何？同じ国民だから、主義、主張が同じなはずがない。

親がその民族だから、子どもも同じ民族の規則に従わなくてはならず、宗教も別のものにしてはならないと、他人が言っているものではない。人はそれぞれ別で共通するからこれも同じというはずがない。自分がこの本で思ったのは、人についてのこと。思った理由を言う前に、この本のあらすじを話そう。

この本の著者の米原万里さん（以下「マリ」さん）は、プラハのソビエト学校に通っていた。その後、日本に戻って大学を卒業し、ロシア語の通訳をしていたマリさんは、プラハにいたころの友人たちのことを生活の忙しさで忘れかけていた。そしてある時、共産主義、資本主義の国々との対立、それに煽られるかのように増える、民族同士での対立の時代、その最も大きかった対立が過ぎた後、友人たちのことを夜にも考えるようになったマリさんは、みんなを探しに旅に出る。その旅の中、日本人だからと新聞を売らない少女、続く民族間の対立などを見る。そして友人たちと再会し、変化を聞いていく。

今世界では様々な差別がある。そして、自国の主義と合わない者は批難されたりする。自分がそうでないと言っても、両親がそうなら、きっとそいつもそうだと、もしくはそうであるべきという考えを押しつけ、強制する。

最近に起こった中国の漁船と、自衛隊の船との接触事故。これも、自分たちの主張を言うだけで、何かをするということはまだしていない。しかし、これが原

因で、中国では日本人が、日本では中国人が批難されてしまうかもしれない。

このような国同士のいざこざから、それをどう思うかということに関係なく、辺りの状況に押し流されてしまう。これには、その国の人（ないし人であったなら）、大人であれ、子どもであれ関係はないだろう。どの人でも、その国の人であるのだから。

国同士なら、規模も大きいので、考えやすいかもしれないが、少数の人同士ならどうだろう。自分が小学生の時、菌まわしというものをしていた時期があった。

そのころ、自分はなぜそれが起こったかもわからなかった。しかし、始まって、自分にそれがくると、他の人たちにいろいろ言われ、恐がっていた自分はそれに流されるままだった。やはりそれも問題になった。そして、その時は先生を仲介に、話し合い、それは止められた。

人は全て違うものである（人でなくてもそうだが）。自分はこの本を読み、本の中で、今まで親しかった人たちが、国の主義と違うという理由でその人を批難し、その流れによって話せなくなるという場面を見た時、そう思った。

人は、自分以外を知らなくてはならない。そして、知った上で相手とどうするかを考えていく必要があるだろう。それは国であっても変わらないと思う。相手の主張を聞き入れ、相手をつぶすのではなく、納得してもらおうよう行動しなければ、差別は増え、流れに巻き込まれる人も増え続けるだろう。

## 4・5年生及び専攻科生の部

(該当なし)

## 優 秀 賞

## 1年生の部

## 僕って何

三田 誠広 著

機械工学科 中村和真

周りにとって、自分はどのような存在なのだろう。そこに存在することで、周りにどのような影響を与えているのだろうか。そんな事を時々考えている自分は、この本の題名を見た時凄く興味が湧いた。

読んで早速目に入った一文が、

「ここにいる僕とは何だろうー。」

主人公「僕」は近頃、誰とも口をきいていない。その為、当然「僕」が周りに与える影響は無く、自分が何故存在するのか分からなくなっていた。それに「僕」は一人暮らしで母親とも入学前に厳しくあたり、「僕」の周りの居場所がどんどん消えていくように感じた。

自分には、この「僕」は不器用で自分を表せない人だと感じた。母親には一時の感情で強制的に帰らせたが、別れの言葉を告げられなかった事を悔やんでいるように見えた。大学の中でも、周りに自分から馴染もうとせず話しかける「きっかけ」を待っている。

そんなある日、同じクラスでB派の山田に声をかけられる。自分を見知ってくれた人間がいた事で「僕」は嬉しくなった。その為、山田のペースに乗りかき話を聞くことに。そして後から、山田のレジメとりを催促しに来た戸川レイ子が現れ、「僕」がB派のデモに参加するという話の流れになってしまう。当然B派についての知識など無く、興味も無かった「僕」だが、デモに参加してキャンパス内をジグザグに歩きながら、シュプレヒコールする。その中で、「僕」は昂奮と熱気を感じ、デモ隊列が一つの物体となり皆と繋がったように思えただろう。ここでの「僕」は、B派の活動は関係なく、ただ皆と一緒にする事で皆と繋がりを持ち「僕」という存在の居場所を感じる事が出来たのだろう。

やがてB派で活動するようになる「僕」だが、B派への意志も知識も無かった。そんな中でも「僕」の居場所が出来、人との繋がりも多くなり自分という存在を見つけ出していた。

ある日、全共闘の結成しようとしている海老原に声をかけられる。そして「僕」に問う。「君はどんなきっ

かけでB派に入ったんだ？」そして、B派の裏を話すのだが「僕」が問題にしていたのは最初の問いだったと思う。B派には確かに人との繋がりがあり、愛があった。でも、自分という存在は下っ端で誰からも必要とされていないと考えた。そして海老原は、あたかも「僕」という存在が必要だと言うように全共闘に入ることを頼む。「僕」の心は揺らぐ。

そしてB派を裏切り全共闘に入ることに。しかしB派と同じで全共闘の知識も無く、全共闘への意志も無く、ただ海老原に一人の人間として認められたように感じただけで、実際はB派のデモほどの興奮も得られず、居場所もなく、結局B派は良かったと思うも裏切ったせいでB派に追われる。

これまでの「僕」を見ていると、何だか怒りに近い感情が込み上げてくる。レイ子が僕の生いたちを聞いた時にぼつりと言った。

「あなたって幸福な人ね。」

というのが、この感情が込み上げる理由だと思う。「僕」をよく気遣って色々面倒を見てくれた母には、うるさくて仕方ないと反抗する。B派という大学で初めて見つけた居場所は自分という存在を認めてくれる仲間がいながら、自分が必要とされていないと思い全共闘に入る。しかし何も変わらず、むしろB派を手放した事を悔いる様だった。

今ある状況を満足せず、むしろ不満に思う。にも関わらず何も行動せずきっかけを待っている。自分の在り方にこだわるのに、そう在ろうと努力しない。

「僕って何」そう聞く前に「僕はどう在りたいか」を考えて、行動し、後悔のしない人生を歩いていきたい。

## 対岸の彼女

角田 光代 著

電気情報工学科 真砂小春

人は誰でも一人になるのは怖い。私だってそうだ。そばにいてくれる人を、一緒にいて楽しい人を求める。でも、同時にほっておいてほしい。一人にさせてくれとも思う。

この作品は、主人公の葵が高校時代に出会ったナナコとの話と、もう一人の主人公、小夜子が葵と出会ったからの話が今と過去を歩き来しながら描かれている。

正直、小夜子と葵の話はよくわからない。性格から何もかもが正反対の二人が考え方の違いを実感しながら成長していく話なのだろう。

しかし、私には同じ高校生である葵とナナコの方が自分に近くて、まるで自分を見ているような気分になって、夢中で読んでいた。

「あたしはさあ。べつにひどい不幸を背負ってるとかそんなことなく、どっちかっていったらきっと幸せな子供で、だから甘ちゃんなんだと思うけど、なんか急にいろんなことがうわあっていやになること、あるの。全部人のせいにして、馬鹿野郎って叫んで、逃げちゃいたくなるようなこと。」

葵が言ったこの言葉に共感できる。

決して家族に不満があるわけではなく、学校でいじめられているわけでもない。毎日が何となく過ぎていく中で、楽しいことだってたくさんある。

しかし嫌なことが一つあると、それをきっかけにどんどん今まで何事もなかったことがすべて嫌になる。どこかに逃げたくても逃げる場所はない。逃げる勇気さえなかった。

ナナコのように一緒に逃げてくれる友達がいたら少しは違ったのだろうか。

読み進めていくうちに、今あなたは「一緒に逃げてくれる友達」がいますか。そう問われているような気がする。

中学の頃の自分なら迷うことなく「いる。」と答えられるだろう。いつも一緒に行動した人生で初めてケンカもした。いろいろなことを私に教えてくれた。

だが、別々の高校に入学して私は寮に入った。今の時代は携帯電話があるからこまめに連絡をとりあっていたが、だんだん部活や勉強などでお互い忙しくなりほとんどメールや電話をすることもなくなった。

住んでいる場所だけでなく心の距離まで離れてしまった。向こうは今でも友達だと思っていてくれるだろうか。葵もそういう思いをしたのだろうか。ついそう思ってしまう。

葵はナナコに出会って、別れて変わった。私も変わったのだろうか。

人は必ず人と接して生きていく。良くも悪くも他人の影響を受ける。そうして大勢の人と行動して、経験した何気ない小さなことでも「自分」になっていく。

高校で新しく友達が出来た。これから先は何人の人たちに会えるのだろうか。その内何人が大切な人になれるのだろうか。

そして、どんな自分になるのだろうか。

## 梟の城

司馬 遼太郎 著

電気情報工学科 一瀬 直人

人は何を目的に生涯を送るのか。考えてみると、例えば家族を持つこと。例えば社会的成功。例えば歴史に名を残すことなどが浮かぶ。しかし実際、「あなたの生涯の目的は何ですか。」と聞かれてははっきりと答えられる人はどれほどいるだろうか。僕は答えることが出来ない。

この本では、はっきりと明確な生涯の目的をもった忍者達の暗躍を描いている。この物語の舞台は豊臣秀吉が天下を治める戦国時代だ。それぞれ違う生涯の目的を持った忍者達が登場する。伊賀の一族を虐殺された怨念と、忍者としての生きがいをかけて豊臣秀吉暗殺を狙う葛籠重蔵。忍者の道を捨てて仕官して伊賀を売り、重蔵を捕まえることによって出世を狙う風間五平などがいる。

重蔵は情熱的に一途に、人としての仕合せを全て捨ててまでも、最後の伊賀忍者として秀吉暗殺という最後の仕事を遂げることを生涯の目的としている。しかし、重蔵は自らの情熱を滑稽だと笑い、その志を妄執だと言う。それなのに、自分自身を愚かだと語りながらも、重蔵はその情熱を変えることはなかったが、物語の途中で重蔵は、小萩という敵である申賀忍者に惚れてしまう。小萩もまた重蔵のことが好きになり、任務を全て放棄して二人遠くで暮らそうと提案するが、重蔵はそれも断って忍者としての任務を優先する。重蔵は小萩との会話で「忍者の生涯は所詮虚仮じゃ。無為に暮らすことが人としての仕合せではなかったかと、臍を噛む思いで、悔いた。」と語っている。それなのに何故重蔵は、自らの行動を愚しいと言いつつも、提案を断ったのか。それは、重蔵が「忍者としての生涯を美しく完結したい」という念願を持っているからだ。

もう一人の伊賀者、五平は重蔵と対照的な考えの持ち主で、忍者ではなく普通の人としての楽しみを求めていた。「忍者が人の世の楽しみを求めて、どう悪い。」という台詞が印象的だ。しかし五平は伊賀忍者として生まれ育ったという過去があるせいで、結局その夢が叶うことはなかったのである。

秀吉の治めていた時代では、生まれが農民だと最後まで農民であった。忍者もまた然りである。が、現代は誰でもどんな職業にも就くことができる。戦国時代にはなかった自由があるのだ。それなのに僕は生涯の

目的を見出せていない。重蔵の忍者としての真っ直ぐした生き様はとても素晴らしいものだと思う。僕も早くそんな情熱を持って目指せる生涯の目的を見つけたい。

## プラナリア

山本文緒 著

環境都市工学科 下鍛冶 大樹

切っても切っても死なない、そして切ったものが再生し、一匹が二匹へ、二匹が四匹へと子孫を増やしていく「プラナリア」について書かれているものだと信じ、この本を手にして見たら、生まれ変わったらその「プラナリア」になりたいとする、現在無職である二十代の女性が主役である話であった。彼女の他にも、夫が会社にリストラされ、自分の娘や息子、家計のために深夜のスーパーのパートをしている四十代の女性であったり、夫から一方的に離婚を言い渡され、彼の会社で働いていたので、職も失った女性であったりと、どれも決して明るい話でもないし、終わり方もすべてハッピーエンドに終わるものではなかった。しかし、どの話も、とてもリアルに描かれており、その世代の方々の悩みであったり、小さな幸せなども、とてもリアルに感じられた短編小説であった。

「プラナリア」の主人公、春香は一年前に乳がんで右胸を取り、その手術以来、何もかも面倒くさく、手術と共に仕事をやめ、「社会復帰」への興味が持てない女性である。僕は男だから、女性独特の病気になることもないし、それになった時の本人の感想を持つことももちろんできないので、この彼女の今の「かたがき」のようなものだけでも、とてもかわいそうな思いを持ちつつ、とてもリアルだな、と感じた。彼女には彼氏の豹介がいて、豹介は情緒不安定な春香が壊れて暴れると、逆ギレして「がんになっちゃったもんはしょうがねえだろ！あきらめろ！」と怒鳴ったりはするけれど、彼女の前から姿を消すことは決してなかった。

この回想場面を、なぜだか、繰り返してしまう自分がいた。理由は自分でも分からないけれど、多分この部分で豹介の人間味、春香の人間性、のようなものが垣間見えた気がしたからだと思う。豹介は春香に、それにいつまでも甘えてるんじゃないやねえよ、という思いが詰まっている部分がとてもにじみ出ている、言われた春香の方が「ごめんね」と言った。この時僕は、親と子供みたい、と感じたりもした。

彼女は、社会復帰への第一歩として、がんであった

時に病院で出会った一人の女性が雇われているショッピングセンター内にある甘納豆店で働くことにした。しかし、あることをきっかけに、やめてしまったのである。それは、その女性が春香のために、と思って家に直接送った、六冊の乳がんに関する本がきっかけだった。この程度のことで仕事をやめてしまうのか、とつい感じてしまった。何がしたいんだ、どこへ行きたいんだ、と最初は感じてしまったが、その後、除々に、彼女にとって乳がんは、一種のプライド、のようなものなんじゃないか、と思ってきた。物語も、この調子で終わっていくのだけれど、こういう終わり方もいいんじゃないかと、読み終わった時に、そう感じた。

何もかも最後には上手に行く、という感じではなく、読んで人への余韻と、少しの？を与えて終わる、というのが新鮮であったと感じた。これは生きている人間、と一緒だな、と思いをめぐらせてしまった。

2年生の部

## 博士の愛した数式

小川 洋子 著

機械工学科 埜本 優樹

博士は記憶に障害を負っていた。1975年、博士と博士の義姉（博士の兄の妻）が乗っていた乗用車と居眠り運転をしていた軽トラックが正面衝突した。博士は頭を強く打ち障害を負い、義姉は左足が不自由となった。博士の背広の袖にはメモが留められていた。

そのメモにはこう書かれていた。

「ぼくの記憶は八十分しかもたない」と。

そんな博士の元へ家政婦がやってくる。記憶が八十分しかもたない博士にとって彼女は常に新しい家政婦であり、初対面の人間であった。ある日、家政婦に息子がいることを知った博士はその息子が心配になり、次の日から二人で来るように言う。博士は家政婦の息子を「ルート」と名付けた。博士は数学をこよなく愛し、二人に数学の美しさについて語る。やがて三人の生活はお互いの温かさに触れて満ちたものになっていった。

話の流れはこのようなところである。

私はこの物語を読んで、博士と家政婦と彼女の息子であるルートとの「友情」でもなく、「愛情」でもなく、「家族愛」でもない、「思いやり」の關係に深い感銘を受けた。

これは家政婦の息子のルートが軽い怪我をしてしまい、



そのことについて博士が杞憂しているときの場合である。

『心配いりません。ルートは生きてますよ。ほら、この通り。ちゃんと息をしています。』そう言いながら私（家政婦）は背中を撫でた。思いがけず、広い背中だった。」

私はこの文章を読んだとき、二人の思いやりの心にとても感動した。息子に博士が怪我をさせたわけでもなく、その上大した怪我でもない、まして博士の中では初対面であるはずなのだ。それでも博士はルートを心配したのである。そして家政婦は彼のその心配を無くそうと背中を撫でてあげたのだ。三人の間にある関係がどれだけ温かく、素晴らしいものであったかがよく分かる。

私はどうだろうか。私も家族や友達などに対して、しっかりと思いやったり、大切にしているだろうか。また博士のように、ついさっき知り合った初対面の人間にでも思いやったりすることができるだろうか。恐らく家族や親しい友達にならそういったことができると思う。しかし初対面の人間には出来ないだろう。なぜなら私は人見知りが多いからである。もし初対面の人間が軽い怪我をしていたとしても私は無視をしようと思う。だからこそ私は博士の思いやりの心はすごいと思った。

友達は大切である。恋人も、家族もまた、大切な存在である。その間での優しさや思いやりはそこまで珍しいものではない。しかし初対面の人間に思いやることのできる人間はそんなに多くは存在しないだろう。

私も出来ない。しかし、この物語を読んで、たとえ初対面の人間にでも、赤の他人にでも思いやることのできる人間にでも、素晴らしいことであるかを知ることができた。私も家族や友達はもちろん、全く顔も知らない人間にでも誰にでも、「思いやる」心を持って接することが出来るようになったらいいと思う。

## 変身

フランツ カフカ 著

環境都市工学科 伊藤雄貴

もしもお前は、朝目覚めて人ではない異形の存在へと変貌を遂げていたとしたら、どうする？

世界は何も変わらない。しかし、無情にも世界は己を時間軸の枠から放り出し、未知感というものをお前から除外する。それが一体どれだけ悲しくて、惨い事実であるか、お前は気付いているのか？

例えばこの作品の主人公。彼なんかの人生は文字通り「最悪」の二文字で片づけることが出来よう。

人として生きていた頃は借金を背負った家族のために必死に面白くも何ともない仕事を文句も言わずにただ続けてきた。だが、ある朝目覚めてみれば突然、巨大な毒虫になっていたという。

なんと滑稽で情のない話か。そう思うだろう、お前も。

それと同時に、家族の彼に対する愛し方の変化。いいか、もはやそれは愛などというものを感じることは出来ない、飼育よりもひどい有様だった。

巨大な毒虫である彼は誰からも受け入れてはもらえない。誰とも生きていくことは出来ないだろうし、もう二度と愛を感じることは出来ないだろう。

ところで、ここまで聞いて、お前はこの事実を明日から受け入れろと言われて領けるのか？

——否。否否。断じて否。

少なくとも万人は是とは言わないだろう。当たり前だ。それが現実。お前がそう思っているように、彼は人の世界から弾き出されてしまったのだ。

では、少し論点を変えようか。お前はすでに人ではない異形の軀へと変貌を遂げていたとする。その状態で、お前は明日から何を夢見て、何を胸中に、生を真っ当する？

そんなことになったら、生きる事さえも億劫になると思わないか？誰からも愛してもらえない。ゆえにそれは誰にも愛を与える事が出来ないということだ。

世界は彼を拒絶した。だからこそ彼にも世界を拒絶する権利があるのではないか。だがしかし、拒絶した先に未来はないのもまた非情なる事実。

自殺するか？それとも開き直って異形としての存在を寛容に許容し、明日を歩んでいくのか？下らん。全くもってそんな答えは陳腐すぎて下らんぞ。

お前は絶対に自殺なんて出来ない。お前は絶対に開き直りなどできない。

お前はきっと——現状を未だに受け入れられず、ただ只管泣き叫ぶのだ。涙を流して、ただ悲壮感に明け暮れる。お前は認められない。赦せないのだ、何時まで経っても現実を。

だからお前は独りであることを誇りに思うだろう。孤独こそ我が無二の孤高と意地を張るんじゃないのか？

どれだけ人から、家族から、愛人から拒絶されても無視を決め込み、ただ耐え凌ぐ。ああ、そういう意味では開き直るといふの正しい解かもな。

さて、ここからが本題だ。お前にはもう一度だけ問おうじゃないか。

もしもお前は、朝目覚めて人ではない異形の存在へ

と変身を遂げていたとしたら、どうする？

裏切りの世界に絶向するか？それとも無視を決め込む？もしかして——駄々を捏ねるつもりか？

ふふ、まあ、俺は何だっていいのだ。人の数だけそれこそ真実は存在していよう。しかし——ああ、そういえば、一つ前提条件を教えていなかったな。

前提条件。お前が列記とした人であるという証明が可能な場合に限り、だがな。

## 夏の庭

湯本 香樹実 著

環境都市工学科 藤井 亜希

「死」とはどういったことなのだろう。死んでしまったらどこへ行くのだろう。こういったことをみなさん一度は考えたことはないだろうか。

この「夏の庭」はそういった「死」に興味を持った3人の小学6年生の少年と独り暮らしのおじいさんのお話である。

ある日、友人の祖母のお葬式によって死について興味を持った3人は、「死んだ人」を見てみたいと思うようになった。すると丁度いいことに近所にもうすぐ死にそうな独り暮らしの老人がいるということを噂で聞いてしまった。これはチャンスだと思い、3人はその老人の死ぬところを見てやろうと、観察を始めることにした。

彼らは毎日観察を続けるうちに、些細なきっかけから観察するだけだと決めていたおじいさんと交流を持ってしまった。おじいさんは彼らとの交流をきっかけに家の手入れや、今まで行っていなかった、ゴミ出しや、洗濯を行うようになっていた。そしてしだいに家はきれいになり、おじいさんも前とは違いいきいきするようになっていった。

8月の最後の週、彼らはサッカーの合宿で4日間コーチの郷里の島に行った。いろいろあったものの、無事4日間が過ぎおじいさんに会うのを楽しみにしていた彼らは次の日にさっそく会いに行った。しかし、そこにいたおじいさんは眠っているかのように安らかに死んでいた。

おじいさんのお葬式が終わり、しばらくしてこの出来事で少し大人になった彼らは卒業し別々の道を歩んでいった。

私は中3の時に祖父の死を見た。祖父は私が思い出す限りいつも入退院を繰り返しているような人だった。

危篤の状態も何度か経験していたが、そのたびに回復し、結構しぶとく生きている人だった。だから今回危篤になった時も、祖父ならまた回復するんだろうなどと心の中では思っていた。しかし、祖父が回復することはなかった。死に際を見ていた母曰く、眠るように安らかに死んでいったらしい。

お通夜の時、祖母が夜中まで祖父のそばにいた事を今でも覚えている。残された人はとても悲しいんだなと感じた。残していく方はどうなんだろうとも思った。それに死んでしまった後はどうなるのだろうかとか、何もかも消えてしまうのだろうかとも思った。

お葬式も終わり、祖父は焼かれて骨になった。とても大きな人だったのにとても小さくなってしまった。

私はあつけないものだと思った。

祖父が死んで2年たった今、祖父の事を思い出すことはほとんどなくなっている。今こうして考えていると、私も死んでしまえばしばらく経てば忘れられてしまうんだろうと思う。そうなるのはやっぱり嫌なので、私は人の記憶の中に生きれるような生き方をしたいと思う。今はまだどうすればいいのか全然分からないが、少しずつ分かってくれたらいいなと思う。とりあえず頑張ってみよう。

## 人間失格

太宰 治 著

建築学科 麻村 晶子

主人公はどうして人間失格になってしまったのだろうか。

「恥の多い生涯を送ってきました。」

これは第一の手記の冒頭である。手記の書き手、葉蔵は幼い頃から「人間」というものの考え方や行動の意図が理解できなかった。彼はそんな自分を周りの者は軽蔑するのではないかと恐れ「お道化」で自らを偽る事で「人間」に溶け込んでいく。やがて彼はその道化の成果と元よりの美貌ゆえ、様々な人達に好意を寄せられるようになる。しかしそういった人々と関わらうちに取り返しのつかない過ちを犯してしまった。そんな自分に対して彼は「人間失格」の判定を下す。ところが彼が不在になるとある女性は彼を懐かしみ、こう語る。「神様みたいないい子でした。」と。

おおよそこの様な筋の男が「人間失格」、狂人と化すまでの手記である。この作品から私は、「人間失格」にならない為には何が必要で何をすべきなのかを考え

てみた。

まず、注目すべきは彼の生い立ちだ。彼は裕福な家に生まれた。私にはそれが幸運な事に思えた。しかし読み進めていくとどうやらそうでもないようだとなった。手記の中で彼の父には台詞があるが、母には無いのだ。ここで私は、彼は母親の手で育てられていないのではないかと考えた。一般家庭に生まれれば大概、母親本人に育てられるが、彼はお坊ちゃんだ。恐らく、母親本人ではなく乳母や下女によって世話をされ育ったのだ。

そしてもう一つ注目すべきは、彼の人間の欲に対する認識だ。一応、彼にも欲があるが、その欲は私からすると無気力で淡白で邪心が無さ過ぎるように思う。これは彼が特に物欲において不自由しなかったからではないか。物欲という欲の代表とも言えるものをさして感じた事が無ければ、欲の持つ醜さも強さも知らないのだろう。ならば当然、我慢するなんて事を知るはずもないのだ。

つまり彼は裕福な家に生まれたばかりに、両親の愛情をほとんど感じずに育ってしまったうえに、我慢を知らず、人間の欲にも疎かったのだ。愛情を知らなかったから人を頼る事も知らず、ただ上辺だけの都合の良い「道化」ばかりが長けてしまった。そして我慢する事を知らなかったから、欲の醜さも知らず、我慢の限界に達した人間の歪んだ欲を垣間見て恐怖したのだろう。

彼が人間失格になった理由は彼の育った環境にあったのだと思う。親からの愛情と人間らしい欲、そしてその欲を我慢する力が無かったら誰でも人間失格になり得るのではないだろうか。愛情と欲と我慢を知らないのは不事な事だ。私は彼ほど虚しい生き方を強いられる人は居ないと思った。そして自分がいかに恵まれた環境で「人間」に育てられたのかを知った。両親から褒められ、叱られる事で私はそこに愛情を感じられる。欲しい物があれば一先ず我慢して、いずれ自分で手に入れれば良い事も教わった。希望と邪心に塗られた欲を自分で体感してきた。だから欲を満たす為に画策する人を怖いとは思わない。

今、「人間失格予備軍」はたくさん居るだろう。そして少しずつ増えていっているのではないだろうか。これからも私達が人間失格にならない為には、自分を「人間」に育ててくれた両親への感謝の気持ちを忘れずに、自分に我慢を強いる厳しさを持つ事が必要だ。そしていつか自分が親になる時には、両親のような「人間」で、親でありたいと思った。

### 3年生の部

## 食い逃げされてもバイトは雇うな 山田 真哉 著

機械工学科 川光 裕士

私たちが生活していると多くの広告と接する。新聞、テレビのCM、インターネットなど様々な媒体の広告を見ている。その広告にインパクトを持たせようと思ったら、恐らく数字を用いるだろう。数字にインパクトを持たせる行為は広告に限らず、会社でのプレゼンなどでも行われているが、私たちはその数字に踊らされていないだろうか。

ここで、本書の内容を確認しておこう。本書では主に数字を良く見せるためのテクニックや世の中にある数字の本質を見極めることが書かれている。

さて、本題に戻そう。先で述べたインパクトを持たせるために用いた数字は、大抵の場合、その本質は全く異なってくる。その数字の真偽を確かめずに行動すると辛酸をなめることが多くなってしまふ。本書ではそれにあてはまる例として、ソフトバンクモバイルが2006年に打ち出した「通話料・メール代0円」のキャンペーンが書かれている。このキャンペーンでは本当に料金が無料になるのではなく、ソフトバンクユーザー同士の場合であったり、無料になる時間が限られていたりと実際には条件を満たさないと無料にはならないのである。その後、これらの条件を明記されるようになったが、このキャンペーンの裏の部分知らずに契約してしまった人も多いのではないだろうか。

こんなことを避けるためにも目先の数字や情報に囚われないようにするためにも、適格に情報を取捨選択していく必要があるだろう。インターネットが普及している現代社会ではインターネットが普及する前の時代と比べて、たくさんの情報があふれている。その中には本当の情報ばかりでなく、事実無根の情報も紛れている。情報の取捨選択ができない事実無根の情報を信じ込んでしまふ。そうすると損をするばかりで得なことではない。嘘の情報を掴まないためにも、情報と接した時に鵜呑みにしないことだろう。鵜呑みにせずその情報についてインターネットや書籍で調べてその真偽を確かめてから自分の情報にした方がいいはずだ。

先にインターネットはたくさんの嘘があふれていると書いたが、新聞やテレビなどのマスメディアの情報を鵜呑みにするのも良くない。インターネットの普及によって、マスメディアにも偏向報道があることも

知っておかないといけないからだ。マスメディアは嘘を伝えてはいけないが、本当のことを全て伝える義務もない。つまり、ある情報を隠してしまえば伝えた情報の意味することも大きく変わってしまう。これは先に述べたインパクトを持たせるための数字とよく似ている。情報の入手先が偏ると本当の意味とは違う情報を掴まされてしまうことも多い。だから、できるだけ多くの情報機関から情報を得ることが大切である。

情報社会で生き残ること。それは鵜呑みにせずその本質を見極めることだろう。このことを肝に命じて生活する必要があると感じた。

## 盲導犬クイールの一生

石黒 謙吾 著

電気情報工学科 殿 嶋 唯 史

この本では、その題のとおり、盲導犬クイールの一生をたどっていきながら、日本の障害者に対する福祉の現状にも触れています。

私がこの本を読んでまずおどろいたのは、日本にいる盲導犬の数が、とても少ないということでした。盲導犬を待っている視覚障害者の数を推定すると、四千七百人近くいるのに、日本で実際に働いている盲導犬の数は八百五十頭しかいないのです。アメリカでは盲導犬の数が六千頭、イギリスでは四千頭ほどいることと比べると、いかに日本にいる盲導犬の数が少ないかが分かりました。さらに日本では毎年十から二十頭しか盲導犬を育成できておらず、日本が他国に大きく遅れをとっていることを感じました。

さて、この本では盲導犬であるクイールについて書かれているわけですが、私の家でも犬を飼っています。エサの時間になると、いつも物欲しそうな目で足に擦り寄ってくるし、「待て」と言えばその場に座って動かなくなるし、知らない人が家を訪ねてくると吠えもします。そして犬の体を洗おうと準備していると、それを感じとってどこかに逃げ去ってしまいます。だから、この本で盲導犬がいかに賢く頭が良いかを説明していても、大抵のことにはおどろきませんでした。しかし、盲導犬はいつも自分の主の様子をうかがいながら町中に潜むあらゆる危険を感知し、それを避けて人を安全に導いている、といったことが書かれている部分を読み、そしてその状況を想像してみると、やはり盲導犬というのはすごい存在なんだと思いました。また、盲導犬の育成が難しく、年に十から二十頭しか育

成できないということにも納得がきました。

そこで、これからは盲導犬の数をいかに増やしていくかということが重要になってくると思います。盲導犬がどんなに素晴らしい存在なのかはこの本を読んで分かりましたが、まだ四千人近くの人が盲導犬を待っていること、そして年間十から二十頭しか盲導犬を育成できない現状を考えると、このままでいいはずがありません。

盲導犬を育成するには、膨大な人の協力が必要になります。まず、将来盲導犬になる可能性を持った犬を交配によって誕生させるブリーダー、そして子犬を一歳になるまで育てるパピーウォーカー、そして盲導犬になれるよう訓練する盲導犬訓練士。一頭の盲導犬を育成するのにこれだけの人の力が必要になり、また、訓練を受けた犬が百パーセント盲導犬になれるわけではありません。むしろ、なれない犬の方が多いようです。そして、ブリーダーとパピーウォーカーはボランティアなのです。

私は、盲導犬の育成に関して自分にもできることが何かないか、と考えました。自分自身がブリーダー、パピーウォーカーになることは学生である自分にとって現実的ではありません。しかし、犬が好きな人達などに呼びかけていくことは可能ではないかと思いました。現代にはインターネットがあります。そして私はsnsのmixiにパピーウォーカーについての書き込みをしてみました。まだ反響はありませんが、こういう小さなことでも、盲導犬育成のために自分ができることをしていこうと思いました。

## もし高校野球の女子マネージャーが ドラッカーの『マネジメント』を読んだら

岩崎 夏海 著

環境都市工学科 花 岡 和

私の高校野球人生は、五回コールド0対10の惨敗という形で幕を閉じた。その後は、野球については特に深く考えず過ごしていたが、この本と出会って、呉高専に入学してからの野球人生を振り返ってみることにした。

この本の主人公である川島みなみは、野球部のマネージャーに入るようになったのだが、何をすればいいのか分からなかったため、ドラッカーの「マネジメント」を参考にしてマネージャーの仕事を進めていった。みなみは、高校野球に携わっているほとんど全て

の人、すなわち「顧客」に感動を与えるための組織を野球部の定義とし、甲子園に行くという目標をたてた。

呉高専野球部は、ベスト16を目標として、毎日、練習や試合を行ってきたのだが、みなみたちのように、自分達で考えて練習メニューを作成していた訳ではない。監督が毎週メニューを作成し、それを部員が行うというものであった。おそらく、他の高校でもこのようにやるのが普通だろうが、私たちの置かれた状況は少し厳しかった。監督が平日の練習には顔を出すことができず、さらに、マネージャーもないチームだったのだ。

みなみたちは、練習方法の変革を提案し、今まで練習に参加していなかった部員達が参加したくなるような、魅力的な練習メニューを作成した。さらに、毎週月曜日をNGD(ノー・グランド・デー)とし、ミーティングを行って改善策を話しあった。私たちは、週ごとに練習メニューが変わっていったが、休日にしか顔を出せない監督が決めていき、更に私たちの意見を出す場というものがなかったの、あまり効果的ではなかったと思う。実際に、練習試合もあまり勝つことが出来ず、効率も成果も徐々にあげていったみなみたちの都立程久保高校野球部とは対照的であった。

徐々に成果をあげていった程高は、次のステップにうつるため、イノベーションに取り組み、高校野球界の常識を変えようとした。そこで、みなみと同じマネージャーの北条文乃、同級生で入院をしているマネージャーの宮田夕紀、監督の加地誠は、「送りバント」と「ボール球を打たせる投球術」をすて「ノーバント・ノーボール作戦」をつくりあげ、さらに「社会貢献」しようとした。前者は、言葉通り、攻撃時には送りバントをせず、守備時にはボール球を投げないといった作戦である。後者については、まずみなみたちは、自分たちが取り組んできたマネジメントの方法を野球部以外の部活にも広げ、さらに学校の問題児たちをマネージャーにしようとした。問題を起さなくなり、学校への貢献にもつながると考えたからだ。結局、みなみたちは、三人の問題児を入部させることに成功したのである。

ここで私は考えた。果たして呉高専野球部は社会貢献できていたのだろうか。私生活では、寮生活をしている私は、食事の時間も、風呂の時間も、守れてはいなかった。いつもギリギリの時間に食堂に入ったり、入浴時間を過ぎているにも関わらず、入浴したりということが多々あった。また、同じグラウンドをサッカー部やラグビー部と併用して活動していたため、ボールを他の部員に当ててしまったり、愚痴をこぼすことも

あった。こう考えてみると、私は、貢献することができず、むしろ迷惑をかけていたと思う。

私は、呉高専に入学してからの三年間、一野球部員として私なりに頑張ってきたつもりだが、この本を読んで、私の心はまだ甘かったことに気づいた。今まで支えてくれた「顧客」に感謝し、「社会貢献」という形で恩返ししていこうと私は決めた。自分を「マネジメント」できるのは自分だから。

## 少年犯罪と向きあう

石井 小夜子 著

建築学科 川頭 あずさ

私は、この本を読んで少年犯罪に対する考え方が大きく変わったと思う。今までは、どうしてこんなに幼い子が簡単に人を殺してしまったり出来るのだろうか。最近の子どもは恐ろしいなあ。と思っていたのだ。しかし、このような考え方を持っている人が、多くいる世の中では、これから先何も変わっていかないし、少年犯罪を増やしているのは、この周りが思っている考え方にも原因があると思った。

まず、私がとても驚いたのは、事件を起こした子の多くがいじめを受けていたり、虐待を受けていたという事だ。また、犯罪を犯した子の家庭環境が特別変わっているというわけでもなく、普通の家庭であるということ。むしろ、親に自分の行動について口出しされていた。いじめや虐待を受けていた子どもは自分の存在価値を見出せなくなり、自分が受けていた暴力で物事を解決していくようになる。それが事件へとつながるのだ。これは、負の連鎖となっていくまでも続いていく。なかには、これに立ち向かって食い止めることが出来るものもいるが、これは自分のことを分かってくれる、信じてくれているという人がいた場合である。同じ環境にいたとしても、犯罪を犯す人とそうでない人との分かれ道は、そこであると思う。

次に、少年法の難しさを改めて感じた。現在の少年法は犯罪を犯した少年がこれからの社会に復帰することが出来るようにと、成人とは異なっている。しかし、完全に復帰しようとさせるのであれば、今のままでは不十分であると思う。少年院から退院したあとでも、社会からは「少年院帰り」という目で見られたり、いろいろな場面で、他の人と差別にあたりする。自分の理解者がいなければ、また同じようなことをしてしまうかもしれないのだ。つまり、その後のケアも非常

に重要だと思う。しかし、被害者側からみるとどうだろう。例えば、自分の子どもを殺されたとする、親は加害者を殺したいくらい憎むだろう。出来ることならば、少しでも重い刑にして、罪をつぐなって欲しいと思うだろう。本の文中に「わたしたちは心からの謝罪と反省を望んでいる。少年たちの本当に更生した姿は見たくないけれど見たい。本当にごめんなさいと謝ってほしい。」という被害者遺族の言葉があった。多くの悲しみを乗り越え、それでも更生して謝って欲しいと思えるのだ。そう思える被害者遺族のためにも、加害者の少年のためにも、必ず更生することが出来るような環境づくりや、サポートをして欲しいと思った。容易なことではないとは思いますが、それが実現出来れば、少年犯罪も減っていくのではないかと思った。

思春期というとても複雑な時期に起こる少年犯罪。この本を読んで、私の考え方も少しは変わったように思う。少年犯罪は犯した少年たちだけが悪いわけではない。その周りの人間たちのつくり出す環境が原因であるのだ。人はお互いに支え合って生きていく生きものである。身近な人を信じ、相手が辛いときにはしっかりと支え、自分も支えてもらうような人間関係をつくっていかねばならないと思った。

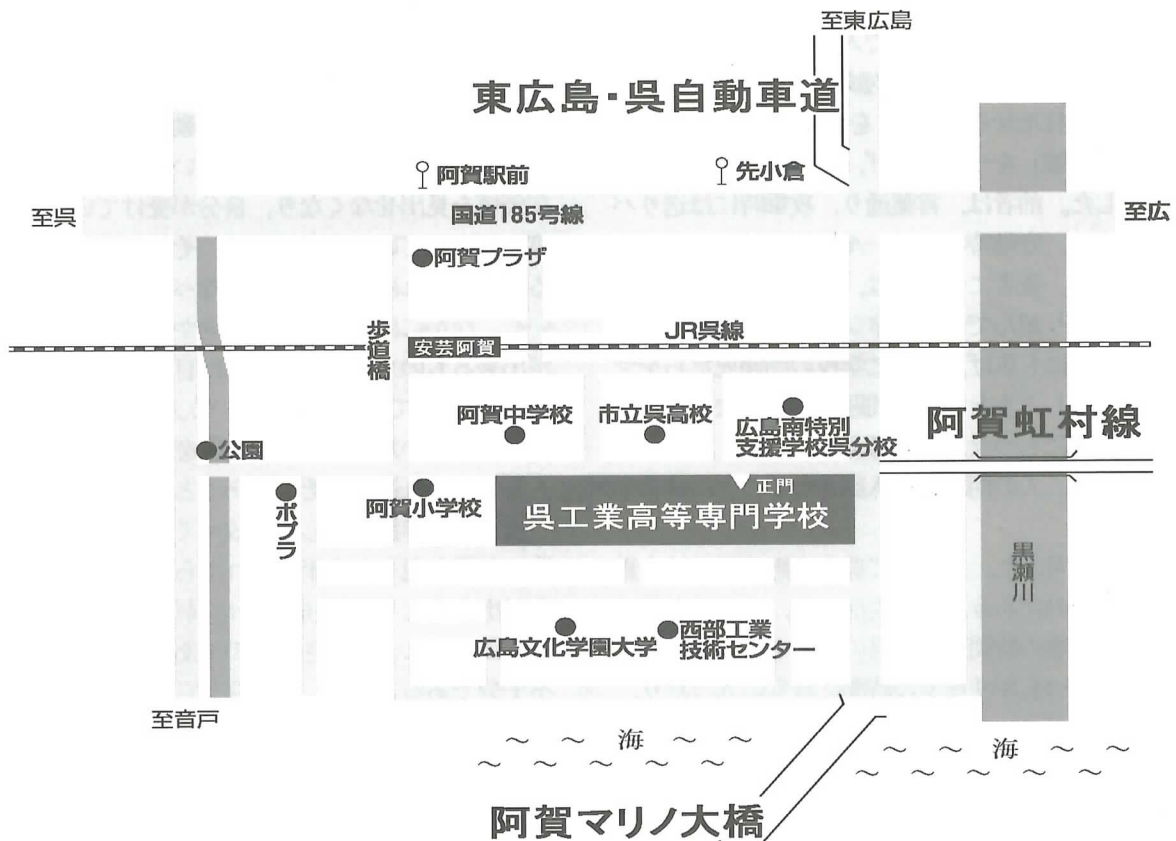
4・5年生及び専攻科生の部

(該当なし)

コラム 変わりゆく呉高专界限

呉高专周辺の情景が様変わりますのでご紹介します。平成23年度内に相次いで3路線（橋）が開通します。これに伴い、交通状況が一変しますので、交通事故防止等に十分注意が必要です。

- ・阿賀マリノ大橋 呉高专東側道路南方から海をまたいで阿賀マリノ地区に架かる橋で、音戸・警固屋方面と国道185号線をつなぐ幹線となるでしょう。（3月26日（土）開通）
- ・阿賀虹村線 呉高专北側道路を東方に延伸し、黒瀬川に新しい橋を架けて先小倉周辺の交通量分散の期待があるため、正門・東門等の出入りには一層の注意が必要となるでしょう。（10月開通予定）
- ・東広島・呉自動車道 呉高专北方先小倉交差点を終点とする自動車専用道路（無料）で原動機付き自転車は通行できません。（阿賀IC－黒瀬IC（仮称）間平成23年度開通予定）



## 留学生在紹介する外国の図書館

## ニューデリー公共図書館

電気情報工学科3年

モヘット



私の故郷はインドの首都ニューデリーです。ニューデリーの中心にある公共図書館は、1951年にユネスコプロジェクトで建てられ、一番古い歴史を持っている図書館です。この図書館が建てられた目的は、独立した国に教育を普及することでした。

この図書館には、色々な規則があります。まずはそれを紹介します。町の住民は図書館カードを作って図書館を利用することができます。一回作った図書館カードは、2年間何度も使えます。このカードを使って、一週間本を借りることができます。

図書館には、インターネットを利用するためにパソコンがあります。図書館の中は沢山の分野の本があるため、置いてあるパソコンから、利用者が読みたい本を簡単に探すことができます。図書館のマルチメディア

コーナーという所で、ビデオなどを見ることができます。

図書館には、進学するために科学、社会学、工学、法学、医学、経済学などの本があります。外国語に興味を持っている人のために、多くの外国語の本があります。

特に多いのは英語、フランス語とドイツ語です。

外国語の本棚には色々な外国語の辞書も置いてあります。

スポーツ、音楽、文化、宗教などの分野の本は別にしてあります。子供のために漫画とか言葉が易しくて面白い本もあります。新聞、雑誌、ジャーナルなどは図書館の2階の閲覧室に置いてあります。毎年新しい本とか参考資料が図書館で公開されています。その上、利用者が図書館に置いて欲しい本も申し込みにより購入してもらえます。

家で勉強をしにくいと思っている人は、よく図書館へ行っています。私は大学入学試験と日本留学試験を受ける前に、この図書館をよく利用しました。物理とか数学の本は、厚くて重いから借りて家に持って帰るより、ここで勉強して終わろうということもありました。

2年前やったことを今思い出しながら書いていて、懐かしかったです。こういう図書館は学生生活に非常に必要だと思います。

## ラオス国立大学中央図書館 (NUOL 図書館)

建築学科3年

スッサー



ラオスでよく図書館に行くようになったのは、大学入学後でした。私が入っていたラオス国立大学には大学図書館と日本センターの図書館がありました。

まず、大学図書館を紹介します。ここはうちの大学生しか図書館カードを作ることができません。図書館に入った所は読みたい本を探すためのパソコンが置いてあります。図書館中は色々な分野の本があります。

専門に関する本と新聞や雑誌を読む場所は分けています。また論文が集められている所は別にしていま

す。辞書以外は一週間に3冊の本を借りることができます。多くの大学生たちは自習の時に図書館に来ています。他の人を邪魔しないように皆、静かにしています。図書館でどんなことをするか、人によって違いますが、大体宿題とレポートをやりに来ます。私は外国語の本に興味がありました。特に英語の本でした。本を読む以外、図書館の上にあるパソコンとビデオの部屋に行きます。

もう一つの日本センターの図書館では、誰でもメンバーカードを作ることができます。ここには色々な外国の本が置いてあります。特に外国語の本は多くありました。日本センターの図書館には、大学図書館と違って、スポーツや音楽、小説、健康、経済など色々な分野の本があります。日本センター図書館なので、日本に関する本がいっぱいありました。私はここで日本の事がもっと分かるようになりました。日本のお祭りや文化は面白いと思っていました。他の国の面白い本も結構あります。

暇な時にこの二つの図書館を利用して充実した時間を過ごすことが出来ました。

## 行事報告 平成22年度ブックハンティング

### ブックハンティング

学生会 文化委員長

小林 香菜



今年からブックハンティングの制度が新しくなりました。今までは年一度、各クラスから1名ずつ代表をだして、ブックハンティングを行っていましたが、今年からは各クラスから2名ずつを代表として、前・後期の2回、高学年と低学年にわけて行いました。

前期は、4、5年生がブックハンティングを行いました。慣れた様子で、クラスの子と相談して次々と決

めていました。選んだ本も専門書と文庫本のバランスがとれたいいハンティングとなりました。時間も予定していたよりも早く終わり、早い帰宅になりました。

後期は1、2、3年生がブックハンティングへ行きましたが、始めは慣れない活動に、どれを選んだらよいか迷っているようでした。なかなかカゴの中に本が入りませんが、その分、本は時間をかけた選りすぐりばかりです。

私たち学生が学生のために選んだ本です。どれも魅力的な本ばかりなので、ぜひ呉高専図書館に寄ってください。私も、自分が選んだ本が借りられていると「興味をもってくれたのだ」と少し嬉しい気持ちになります。ブックハンティングに参加しやすい環境にもなりました。「友達としゃべりながら買い物したい」「新刊の試し読みがしたいから」など小さなきっかけでいいので、まずは本に触れてみて、興味を持ってもらいたいと思います。友達と一緒に、兄弟と一緒に、きになるあの子と一緒にでもよいです。ぜひ今年のブックハンティングにご参加ください。よい体験になると思います。



第1回（8月4日）



第2回（12月3日）



## 秋のブックハンティング

環境都市工学科 2年

尾道 聖子



私は今回初めてブックハンティングに参加させて頂きました。クラスメイトと本を手に取り、ああでもない、こうでもない、と悩むのはとても楽しかったです。さすがというべきか、広島駅前のジュンク堂は広くて取り扱うジャンルも豊富でますます選ぶのが楽しかったです。

途中でちょっとしたアクシデントもありました。ある程度本を手にとった頃に、事前にリストアップしていた本の中から一冊を店の検索機で探したところ、すぐに引っかかったので早速紙を手にとり、棚に向かうこと数分、クラスメイトのNさんも一緒に探してくれたのですが一向に見付からず、ふと紙を見てみると下の方に「在庫なし」の四文字が。検索にかかった事に浮かれていたようで、油断していました。見落としには注意しなくてははいけませんね。

そんなこんなでつい立ち読みしてしまったりしながらも何とか選び先生方のもとへ行くと、先にチェックを受けている方々がいらっしゃいました。

どうやら何冊かは振るい落とされるようで、私たちの番が来たときに訳は分かりました。やはり高専として常に新しい専門書を取り入れる必要があるらしく、予算内でクラスごとに1・2冊ずつは専門書を選ぶように、とのことでした。

「黒い兄弟(上下)」を泣く泣く断念し、環境の学生らしく環境工学の棚を眺めてみたのですが、似たような内容にしか見えなかなかな選べませんでした。

そこでカメラマンとしていらしていた環境の竹内先生にも一緒に選んで頂きました。ここでクラスメイトのNさんが手に取ったある本は竹内先生も賞賛なされる内容で、良い本ならそれなりの値段がするだろうと、児童書をもう一冊手放す覚悟で確認してみると、意外なことに先ほどの「黒い兄弟」で十分に足りるお手頃な値段でした。結局私たちは推理小説と児童書と環境系の専門書を予算内で選ぶことができました。諦めざるを得なかった「黒い兄弟」やその他の本は次回のブックハンティングへの参加を狙うか希望図書として希望を出すかしようと思っています。

さて、小学校の頃にあまり読書をしなかった、という方はもしかすると多いのかもしれませんが。そんな方にこそ今お勧めしたいのが児童書です。児童書というとその名の通り児童だけが読むものと思われるかもしれませんが、そうとは限りません。世界中の大人にまで

愛されている「ハリー・ポッター」シリーズや「ダレン・シャン」シリーズも立派な児童書です。今回私が選ばせていただいた児童書は「穴」「どろぼうの神さま」、「デルトラ・クエスト」「ドラゴン・ランス」の4冊です。後ろの2冊はそれぞれのシリーズの外伝に当たるものですが、「デルトラ・クエスト」については、アニメにもなったファンタジーですが、第一部も第二部も全て呉高専の図書に揃っています。一冊一冊が短いのでとても読みやすく、読書を始めるならこの中では一番良いかもしれません。ちなみに外伝といってもこれは本編が始まる前の外伝ですので、これから読んでも問題ありません。「ドラゴン・ランス」については、RPGの原点とも言われるファンタジーですが、この本は物語が終わった後の話なのでこれから読むとネタバレになってしまいますし話にも入りづらいでしょうから、広の図書館にある一巻からご覧になるのが良いと思います。「穴」という何とも短いタイトルのこの本は、スニーカー泥棒と間違えられた不幸な少年の物語です。更生施設という子ども社会の中で悔しかったり悲しかったり時に嬉しかったり、内容の割にはどこか温かい、読んでいて安心できる本です。過去と現在の物語が交差しているのも見所のひとつです。続編として「道」という本も出版されていますので、もし「穴」が気に入ったという方にはお勧めしたいです。これだけお勧めだと連呼してきたわけですが、最後にもう一つお勧めさせて頂きます。「どろぼうの神さま」はヴェネツィアで繰り広げられる少年たちの物語です。どろぼうの神さま・スキピオや家出した兄弟、一緒に暮らす仲間たちや探偵など、個性豊かなキャラクターたちが視点を交代しつつ物語は展開していきます。ヴェネツィアの街並みも詳しく記されていて、噴水やライオンの像が目につくようです。“大人になると忘れてしまうけど、子供の頃は大人になることを夢見ていたんじゃないかな”というテーマが心に響きます。この本の作者コルネリア・フンケさんの著書「魔法の声(インク・ハート)」は映画化されていて、こちらも素晴らしいファンタジーです。

ちなみに今回同じクラスのもう一人の参加者は赤川次郎さんの推理小説を何冊か選びました。推理ものはあまり読んだことがありませんでしたが、Nさんが同じシリーズ内から何冊か揃えてくれたようなのでこれを機に挑戦してみようかとも思っています。

本を手にとるとき、まず興味を引くか否かは大抵の場合題名と表装で決まります。表装については、同じ本でも絵が違う事があり、ハードカバーか文庫本かという違いもあります。私は児童書を選ぶときは雰囲気重視してなるべく絵が描いてあるハードカバーのものにしました。希望図書で希望を出すのも良いですが、実物を見て好きなものを選ぶというのがこのブックハンティングという制度の利点の一つだと思います。

この拙い感想文に目を通して、なるほど、と思った方は、是非今後のブックハンティングに参加してみたいかでしょうか？

## 新任教員の随想

### 文学書のすすめ

人文科学系分野 外村 彰



高専生の皆さんは、主として理数系の専門知識を、各学科で深く学んでいます。卒業後は、高等専門教育を修めたエンジニアとなって各分野で働く道がひらかれてもいます。

高専で学ぶことは、そうした意味で高い意義をもつのですが、それでもつい、他の領域での自発的な学びが、浅くなる場合があるかもしれません。

たとえば、自己の人間観、内面的価値、ないしは感受性を磨く修練などは、学校教育では、往々にして閑却されがちです。自ら進んでわが精神を耕し、自己の人生の問題意識を見きわめようとする——そうした自己教育を課すことで、高い専門的知識とのバランスなり振幅ある世界観を、身につけるのが高専生やその卒業生の望ましい姿のように、私には願われるのです。

どんなに専門知識を体得していても、数式の難問を解けても、——それらとは異なる世界があります。それは人間の心・感情・美の領域です。これらはみな、答えが一つと決まっていません。

心や感情は「つかみどころ」が得難い世界です。

自分の感情のコントロールは、人間のもっとも苦慮するところでしょうし、わが心ですら常に変幻しているようなものなのに、他者の心を読みとることは、かなり至難な業ではないでしょうか。まして、美なるものなど、そもそも文化や時代の違いによって、基準がかなり異なったり、します。

たとえば誰かを愛する時、その人の心はいつも揺れまどいます。相手の心の動きが読みとれず、不安な思いが波うつようになります。美しい恋人が、急にそうでなくなったりもするでしょう。心とは、感情とは、じつに曖昧で不安定なものです。

一般に、美的なものに私たちは感動します。物語や映画、音楽から、言葉にならない感動を得た経験は、誰にでもあるでしょう。しかしその感動を具体的に表現するのは、とても困難です。

さて、そうした答えを一つに絞りきれない、表現するのが難しい領域に、対応できる力を養うにはどのようにすればよいのでしょうか。

私の薦めたいのは、まず文学書に接することです。

文学は、芸術の一ジャンルで、人間にとっての心や感情、また美のありようを、言語を媒介として追求・表現しようとする世界です。

文学書には、これが答えだ、とは書いていません。文学は、宗教のように答え（教義）を与えようとはしません。迷いを悟りに導くのが宗教の本質とするならば、迷いそのものを、そのまま人間の真実として示すのが、文学の本質です。

ちなみに文学の描く美は、言葉にならない感動を、それでも言葉で描き出そうとするところから創られます。芸術そのものが、音や色や線を用いて、そうした感性の世界を何とか表現しようとはします。芸術家個人の感受性から、普遍的なそれにつながる美を生み出そうとするのです。

人生、誰も一度きり、です。一度しかない人生ならば、教祖などからの借り物でない、自分の考えや感じ方から生まれる、かけがえのない人間観・人生観、また感性を持っていたいものです。

しかしわれわれは、常に迷い、影響され、欲望し、——わが人生の意味を悟りきることができません。でもそうした「煩惱」にまみれた、迷いの姿こそが人間存在の真実なのだと思います。文学は、そんな迷える人間の真相を、われわれに追体験させてくれる世界なのです。

ここに、自分の似姿がある、同じように恋や生きる意味に迷い悩む人間がいる、あるいは、まったく異なる価値観がある、そう共感ないし感受するところに、感動の本質はあります。感動はその意味で自己発見です。迷い悩むとは、よりよき生を求め、問い続けることでもあるでしょう。人生如何に生くべきか、「わたし」とは何か、世界とは、美とは、そうした重い問いを、問い続けるのが人生で、人生は悟りなき問いの継続だと思います。

そのような心細くも自分らしいわが人生の、心の糧・心の友になってくれるのが文学書です。推薦書はここに挙げませんが、現在の自分にふさわしい様々な本との出会いを、向後ともわが人生への問いを胸に、主体的に探し、重ね続けてくださることを願っています。

## 二人の作家

人文科学系分野 富村 憲貴



文章には人柄が出る。人によって受け取り方は様々だろうが、名の知れた人のものでない文章でも、巧拙を超えて胸を打つし、「偉い」人の文章を読むとからっぽということもある。できればそんな文章は書きたくないが、中身のなさはいくら取り繕ったところで見ることがある。ないのならばしょうがない。

まして読んだ本について書くとなれば、大げさに言えば思想信条の一部を開陳することにもなってしまうわけである。一応英文学研究に携わっているので、名作をあげてみたくもあるが（というように文章に見栄が表れたりもする）、ここでは心の中に長く、深く残っている二人の作家について書こうと思う。

小学生の頃に良く読んだのが、眉村卓の作品だ。学生の皆さんの中には聞いたことがないという人もいるかもしれない。最近公開された草薙剛主演の映画『僕と妻の1778の物語』の原作（の一部）である、『妻に捧げた1778話』の作者だ。余命わずかな妻のために1日1話を書くことを自らに課した作者が、その日々をいくつかの作品とともに綴ったものだ。

このような形で脚光を浴びたのには少々驚いたが、読者の一人としては嬉しい話であった。組織の内側にいる人間の視点で描く、インサイダーSFという作風で知られる作家であり、ショートショートやジュブナイル（少年少女向け）SFも多く物している。『時空の旅人』は戦国時代やタイムパラドックスへの興味をかき立ててくれたし、『迷宮物語』は幻想と青年、企業人の姿が不思議な混交を見せてくれた。この作品にはりんたろう、大友克洋らによる映画版もあり、そこで使われていたピアノ曲の印象が強烈で、鍵盤で懸命に音を拾ったのも懐かしい思い出。小学校の音楽の先生に曲名を尋ねて、サティのジムノペディ第1番だと教えていただいた時の喜びは忘れられない。

特にショートショート作品集はくり返し読んだ。親がスーパーで買い物をする間、横で歩きながら読んでいたこともある。ショートショートの完成度としてはやはり星新一が素晴らしいが、眉村卓の作品は、構成の妙というよりも、身近にありそうでしかし不条理な、

独特の雰囲気が好きだった。子供の私にとっては、大人社会を垣間見せてくれるものでもあった。

長じてからもたびたび作品を読み返すことがあり、大学院時代に古本屋で探しあてた短編集『奇妙な妻』は、子供の頃では味わえなかったであろう思いがけない感動を与えてくれた。ずいぶん前の映画になってしまったが、『マトリックス』を思わせる着想の1960年代の長編もある（先駆者は他にもいるけど）。現在は入手しにくい作品が少なくないが、個人的には読み継がれてほしい作家の一人だ。

同じくらい長く読んでいるのが椎名誠だ。子供の頃は怪しい探検隊シリーズを楽しんでいたが、最も印象深く、これまたくり返し読んでいるのが、高校生の時に出会った『哀愁の町に霧が降るのだ』である。椎名誠、沢野ひとし、木村晋介、イサオの男4人による、陽差しもほとんど入らない東京の6畳間のアパートでの共同生活を中心に描いた作品だ。

話は椎名誠の高校時代から始まり（その話がなかなか始まらないのも面白いところなのだが）、二十歳頃までの期間に渡るので、ちょうど高専生の皆と同じ年代にあたる。少し（十分？）アウトローな高校時代、個性的な仲間との同居生活が、時におかしく、時にかなしく綴られている。金はなくても豊かな暮らしに憧れすら抱いた。教員の立場としては地でまねをされると困るところも正直に言えばあるのだが、すばらしい青春譚である。

二人に通じるのはSF作品の書き手であるということだが、もう一つ共通していると感じるのは、人間を基本的に肯定しているということだ。もちろん、人間のいやな面や、不気味な恐ろしい世界も描いているし、作家個人の生活には辛い局面もあったようだ。しかし、私が読んだ作品について言えば、そのどこかに温かさがあるのだ。作品のベクトルは、死ではなく生に向かっている。だからこそ読み続けてきているのかもしれないし、これからも、日々に疲れた時にページをめくるのだろう。

## 技術書の儂(はかな)さ

自然科学系分野 山田 宏



皆さんと同じ高専生の頃は、ジャンルを問わず様々な本を毎日の様に読みましたが、前職の研究所勤務の頃は、論文集と専門書が殆どで、30年間、全く文学等の単行本とは疎遠でした。唯一欠かさなかった読書と言えば、昼食後の月刊誌「文藝春秋」の講読だけでした。ですから、皆さんにご紹介できる様な本の知識を持ち合わせて居らず、参考になる様な随想を書くにも書けないと言う有様です。

皆さんは、今、工学技術者としての基礎勉強を一生懸命行い、着実に知見を広め、深めているところであり、気付かぬ内に、普通校に行った友達とは、飛躍的な工学力の差が生じている筈です。本校の工学技術の進歩を見据えた専門教育を通して、日々進歩している工学技術を取り入れながら、普遍的な工学基礎を学修しており、進歩しているからです。

一方、工学技術に関わる本「技術書」の多くは、改訂と言う更新が為されないと、重版はあっても、結局、絶版への途を歩みます。

自分の研究開発成果が、単行本である「技術書」として、特に他人によって評価され掲載される事は、大変嬉しいものです。中でも、教科書的な本や、世界的権威のある著者の事典的な座右の書に掲載される事は、前述の普遍的な工学基礎技術に認知されたとの、自己満足感(錯覚?)に浸ってしまいます。

例えば、「アモルファス金属の基礎」(増本健編著、鈴木謙爾ら著、1982年、オーム社)と言う本があります。「アモルファス半導体の基礎」と言う姉妹編も刊行される程の、アモルファス研究の萌芽期の本です。この本の第3章の3.2.5「EXAFSによる局所短範囲構造の選択的観測」節が、私の工学修士論文を引用した内容になっています。日本で初めて、通常X線源を用いてEXAFSによるアモルファス構造解析を実現したことと、

世界で初めて、金属-金属系アモルファス合金の短範囲原子配列構造を解析した事が「売り」でしたが、もう、この本は「絶版」となり、一部の図書館でしか見ることはできません。自分の研究が教科書的「技術書」に掲載されると喜んだのも束の間、こまめな改訂を続けられない限り、直ぐ「絶版」になってしまうのです。

また、「Handbook of Semiconductor Wafer Cleaning Technology」(Werner Kern 編著、1992年、Noyes)と言う本があります。清浄表面形成技術分野の世界的権威であるKern博士の集大成的、事典的な本です。この本の第8章「Remote Plasma Processing for Silicon Wafer Cleaning」の4.0節と5.3節に、私の開発した技術が、アメリカ物理学会(AIP)の著作権許諾の下で掲載されています。世界で初めて、超表面構造と言う、結晶性の良い清浄な表面にしか現れないシリコン表面を、今までにない低温で実現した新技術について詳解したものです。この本は、工学関連の蔵書が充実している図書館では直ぐ見つけられますが、新たに入手する事は困難でしょう。将来的には消え行く運命にあります。

この様に「技術書」の多くは、発刊後しばらくして霧消してしまいます。これは、改訂、即ち更新を続けて行かない限り、存続し難いと言う諸行の現れです。

でも、皆さんは違いますよ、ね。皆さんにとって最大のキャリアである専門学力は、本校での専門教育を通して、日々積み重ねられ、高度化し、更には、自学自習等で更新され続けている限り、「技術書」のような儂い途を辿ることはありません。是非、将来の、持続発展可能な開発(Sustainable Development)を実現し続ける、快適な社会の構築に寄与できる様に、専門能力を研ぎ続けて行って下さい。

## 私の読書

自然科学系分野 影山 優



専門書と格闘し1年以上を費やし読破する読書，論文の主結果の把握だけを目標とした2,3日の速読，友人との輪読等等など読書といっても色々なスタイルがあります。

ここでは，多くの学生に参考にしてもらえるよう私の読書経験を通して，文庫版で入手しやすい古典的な本を紹介したいと思います。

私が読書習慣を持つきっかけとなったのは大学1年生の頃手にしたゲーテ(1749-1832)の有名な作品『若きウェルテルの悩み』でした。昔の文庫版は字が小さく，難しい漢字がやたら使われているといったもので，最近の文庫とは違い，少なくとも私にはとっつきにくいものでしたが意を決し読破しようと試みました。

物語の内容を念のため記しておく，ロッテという親友のいいなずけに対するウェルテルの恋と破局を描いた書簡体の小説です。抒情の言葉とともに語られる自然描写，感情の吐露に胸熱くなる場面がちりばめられていて，苦労しながら文庫のページを練るたび新しい感動を覚えたのを記憶しています。この体験を通して読書に喜びを覚え，以後様々な本を読むようになりました。

もう一つ思い出に残っている本として，これもゲーテ関係の本ですが，『ゲーテとの対話』エッカーマン著 山下肇訳(岩波文庫)があります。エッカーマンといういわばゲーテの下でアシスタント的仕事をしている人物が，ゲーテと旅行先，書斎，食事をしながら等等様々な場面で対話した10年間(1822-1832)の記録です。『ファウスト』の完成に身を削るゲーテの姿が垣間見れたり，「重要なことは，けっして使い尽くすことのない資本をつくることだ。…有用な仕事に集中

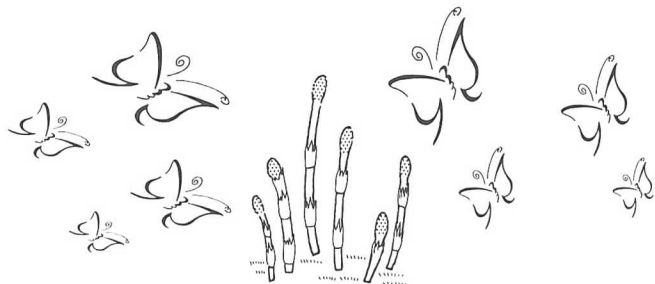
して君にとってなんの成果にもならぬこと，君にふさわしくないようなことは，すべて破棄したまえ。」(上巻 p.162より抜粋)などといった箴言がちりばめられています。日常で思い悩んだときなどはいつもこの本に救いを求めています。

科学の本でも薦めたいものがあります。まずは，ポアンカレ(1854-1912・有名なフランスの数理科学者)の三部作『科学と仮説』，『科学の価値』，『科学と方法』。もし数学を計算の道具だけとしか思っていないのなら，ぜひ手に取って数学のまた違った側面があることを読み取ってください。

次に，ガリレオ・ガリレイ『星界の報告』を通読は無理でも，一度手に取ってみたいと思います。事象を観測しデータを取り続けることで，そこにある現象が明らかになる。皆さんも実験や実習で行っているこういった科学的考察が400年以上の歴史を持っているという史実に驚くにちがいません。

ドストエフスキーやカフカの作品，あるいはプラントやニーチェの残した言葉など，まだ紹介したいものがありますが，それはまたの機会にしましょう。

最後に言っておきたいことは，皆さんも学生のうちに読書の習慣と古典的な本を読み通す力をぜひ身に付けてもらいたいということです。もちろんライトノベルやマンガを読むことも立派な読書だと私は思います。しかし，古典的な書物を苦労して読むことがなければ得られないものも一方で存在します。そして，その読書で得た知識や感動は不思議なもので長い間記憶の奥底に生き，その人の精神的な糧を提供してくれるようになるからです。



## 読書が十代から好きだったら

電気情報工学分野 梶原和範



高校までに使った教科書で手垢のついていないランキングをしてみた。もちろん手元にはないから思い出してみる。ダントツの音楽に続き、2位が国語。バーコードのように薄らとパターンが出来ていて、そこが漢字とかの練習のページであることを見事にあらわしている。試験に出てくる『この場面での主人公の心情を記せ』なんていう問いには答えられません。ワカラナイのです。

そういうわけで、読書感想文は解説文のお世話になっていました。高3のとき国語の先生に「県のに応募するから、手直しして」と言われてびっくり仰天です。

そのまま放置することにしました。書ける訳がありません。読んで書いていれば自分の思っていることが整理されて、もしかすると何かに取り組み始めるきっかけになったのかもしれませんが、40をとっくに過ぎた今では思い直しても遅過ぎの感があります。

「ご冗談でしょう、ファインマンさん」(岩波書店)を読んだ大学院の頃に、ようやく“積んどく”から抜け出せました。ファインマンさんが考えた物理学とは直接関係なしの様々な出来事が描かれています。

小学校にあがる前の子供と徒競争をすることになって、スタートと共に前を向いたまま逆走するファインマンさん。子供は途中で気づいて立ちすくむのですが、ファインマンさんの一生懸命でひっくり返りそうな奇妙な走りに刺激されグランドを1周して子供の勝ち。いつも面白いことを考えている人、それがファインマンさんです。

この時期読み始めたのが、月刊誌の新潮45に連載されていたビートたけしの世紀末毒談(つまり、時代は1990年代ということです)。ビートたけしは照れ隠しで今も毒づいているようにみえるのですが、揺らぐこの国を分析して憂いている弁舌は壮快だし、柔らかな視点の転換がすごいと思う。最近読んだのは北野武『超思考』で、見出しに「無性に腹が立つなどの症

状があるときは、読書を中止することをお勧めします」という但し書きを付けてしまうくらい世相を皮肉っている。

同じ新潮45に連載を書いている曾野綾子さんには、助けられた。彼女のエッセイ集に「失敗という人生はない」というのがあって、僕がしょげていたときに本屋で出くわした。確かこんな風書いてあったと思う。

「そもそも、あなたがしてしまった失敗というもののほとんどが数千年前の昔からあったことなのだから、たいしたことではないのである」と、重大事と思ひ詰めることをやめさせてくれます。「失敗」ということの意義付けは人によって様々なのですが、「失敗しちゃった」と呟いてしまえばそれで気楽に行ける気がする。ありがたい。この文庫本は重版しているようですから、「失敗」ということを気にする人が多いのは確かです。

今はアルボムッレ・スマナサーラ著「怒らないこと2」を読んでいます。「怒らないこと」が実践できなくて、「2」に突入です。散髪に行って「最近本読みました？」と聞かれ、車を運転している間にもちょっとしたことで怒っているけれど、それが普通だろうということで共感してしまう体たらく。

著者は仏教の長老で、キリスト教やイスラム教といった一神教とは異なり、許すという発想がないといっています。つまり許すという行為ができる完全な人や神といった存在自体を仮定していないのです。仏教とは生きるという事で生じる諸々の事柄を科学的に分析して対処する方法だといっています。「怒らないこと」では、怒りを分類し、怒りが生まれないようにする方法を示しているようです。「3」が出る頃には、あまり怒らなくなってきたという状態にありたいものです。

国語の先生のあの言葉は、「本当は読んでないだろう」と皮肉を言ったのだと今はわかります。本を読まなかったから、言葉の意味する所がよくわからなかったのです。

## こころの洗濯のススメ



電気情報工学分野 平野 旭

新任教員の務めとして、読書に関する執筆の依頼を受けたが、私は読書が非常に苦手だ。専門的な知識を得る為に何冊も本を購入することがあっても、純粋に「読書」を目的とした本はなかなか購入しない。子供のころからじっとすることが苦手で、本を読むといった単調作業が苦痛で仕方がないのである。ところが年に数回、無性に「読書」をしたくなる時がある。そういったときは、決まって小説よりもエッセイのコーナーに本を漁りに行く。

読書嫌いの私にとって強く印象に残っている一冊の本がある。高専時代に読んだ辻仁成の「そこに僕はいた」というエッセイである。エッセイというよりは、自叙伝に近いかもしれない。その本は、高専大会がひと段落ついた夏休みのクラブの帰りに、読書感想文用の本として呉駅の本屋で購入した何気ない一冊である。

読書嫌いの私が最寄りの駅に着いたことに気付かないほど、夢中で読みふけていたことを覚えている。

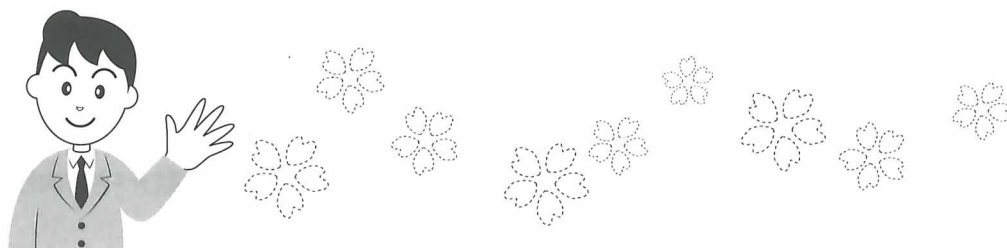
内容は、誰もが共感できる甘酸っぱい恋の話から、ここでは書くことのできない青春ど真ん中のエピソードまで幅広いものであるが、それぞれのエピソードには、必ず、ズキッと「心の痛み」が伴った。例えば、家計の為に新聞配達をする少年を馬鹿にしていた幼少期の著者が、その少年の懸命さに影響を受けて一緒に

新聞配達をするようになったエピソードなど、自分の同じような経験を振り返って反省させられる「痛み」だ。

「読書」をしたくなる時は、大概、この手の「痛み」を感じられる本を読みたくなる。そして、人間関係で行き詰っている時が多い。もしかしたら、自己中心的で他人の痛みを考えられなくなっている時、本能的に「こころの洗濯」をしようと「読書」がしたくなるのかもしれない。

企業では、「後工程はお客様」といった言葉が使われる。本校教員になる前、私は企業の自家発電プラントで働いていた。その時、関東工場からわざわざ「燃料」として運ばれてきた1tの袋に、到底燃料になりえないゴミばかり入っていたことがあり、「もう少し『後工程』のことを考えてくれれば、効率も利益もあがるのに…」と憤慨しながら手作業で分別したことがある。

本校では窃盗が絶えないし、実験レポートも信じられない体裁で提出する学生がいる。窃盗される“相手”、“後工程”である教員のことを考えていないから出来ることである。宿題やクラブで忙しい毎日で、年頃ゆえに悩みも尽きないと思うが、そういう時だからこそ、エッセイの一冊でも読んでみてはいかがだろうか。読書嫌いな私から、「こころの洗濯」をおすすめしたい。



## 私の推薦図書

スティーブ・ジョブズ 驚異のプレゼン —人々を惹きつける18の法則

カーマイン・ガロ 著

日経BP社



自然科学系分野

原本 博史

面白みの無いプレゼンで将来の展望や新機軸を聞かされるのは、堪え難い苦痛である。細かくて見えない字で埋め尽くされたスライド、要点が分からない抑揚の無い声、明らかな準備不足・・・

取り返すことのできない聞き手の貴重な時間を奪っておきながら、話者は平然と自分のペースでしゃべり続ける。

「スティーブジョブズ驚異のプレゼン」(日経BP)は、アップル社の最高経営責任者スティーブジョブズによる素晴らしいプレゼンの秘訣をまとめた一冊だ。

技術者として新技术を世に送り出す際の彼のプレゼンを題材に、その重要性を説き、少なくとも努力すべ

ば獲得できる魅力的な表現技法について、沢山の具体例を分析している。

普通なら新製品の利点を説明するとき、箇条書きで良い点を並べてスライドを作る。しかし、それでは聞き手には薄い印象しか与えない。ジョブズのプレゼンでは箇条書きが用いられたことはなく、1枚のスライドに1単語というのもしんしくない。かわりに豊富な写真や動画を用いて視覚に訴える。視覚で足りない部分は模型等を使って触覚で理解させる。そして誰でも分かるシンプルな言葉で斬新さをアピールする。

講演時間はせいぜい10分。そのためにジョブズは毎回数百時間の練習を積む。誰よりも情熱的に舞台上で振る舞うことで、あっという間に聞き手を虜にする。最高の舞台は予め用意されているものではなく、彼自身が作り上げているのだ。

研究発表のような場では、必ずしも同じ手法を使えるとは限らない。しかし、聴衆を巻き込めないのは話者の責任である。理工系の人間として、表現力を身につけること無く社会に出ることは許されない。本書を読むと、自分の表現スタイルが欠点ばかりであることに気づかされる。みなさんがすこしでも早く本書に触れ、よりよい表現ができるように心がけてほしいと望む。

バイオプラスチック材料のすべて

日本バイオプラスチック協会

日刊工業新聞社



環境都市工学分野

及川 栄作

バイオプラスチックとはグリーンプラ(生分解性プラスチック)とバイオマスプラスチックの両方の性質を合わせ持つプラスチックのことである。グリーンプラは環境中に放出されたとしても、自然に炭酸ガスや水まで生分解され、環境に低負荷なプラスチックである。

これに対して、バイオマスプラスチックは、昨今の地球温暖化の影響や資源エネルギーの持続的な利用も考慮する立場から、材料はバイオマス(生物由来の資源)

であり、使用後も他の材料やエネルギーとして再生可能であるという点がさらに加わっている。本書はこのような説明に始まり、最近のバイオプラスチック製品の材料や種類と用途の広がり、強度と耐久性の改良などが写真入りで説明されている。

私は環境都市工学科で廃棄物と資源循環についてや、バイオマスエネルギーと持続可能な社会について等をテーマに2年生から専攻科まで講義を受け持っている。

また、研究テーマで発泡スチロールの微生物分解処理やバイオリサイクル(微生物や酵素を応用したリサイクル法)技術開発に取り組んでいる。この中で、学生にはバイオプラスチックを例にして説明しながら、教育研究を進めており、講義の始めには必ず、日本は2000年をリサイクル元年としました、バイオマス・日本総合戦略などと掲げて、これまで資源循環に関わる技術開発を推し進めて来たと話している。

本書はこのような日本の推し進めるリサイクル技術革新の一端を知る本でもあり、これらの技術例を通して、技術大国日本の今後の進むべき方向性について考えて見るのも良いと思う。



コンクリートを巡る旅  
—コンクリートから人への贈り物—

藤原忠司 著  
技報堂出版



環境都市工学分野

三村 陽一

しいものではありません。定年退職した技術者とその友人による旅行記風の構成になっています。文章も、二人の会話形式になっているので、とても読みやすくわかりやすいです。コンクリートに興味を持つための入門書としては最適ではないでしょうか？

二人が訪問する先は、日本初の民間セメント工場や鉄筋コンクリート橋のような歴史的な場所から、最新の技術が盛り込まれた橋りょうなど多岐にわたります。

他にも、古代ローマ人がコンクリートを利用して道路や水道橋を建設し、ローマ帝国を築いたことや、配水塔として造られた建物が、図書館→演劇練習館と使途が変化した事例などが紹介されています。

そして、本書には呉市が登場します。呉市安浦漁港には、漁船を守るための防波堤が設置されています。実はこの防波堤、元々は防波堤ではないのです。この防波堤の本来の姿は、コンクリートで造られた船。戦時中、鋼材が不足していたため、コンクリートで船を製造したのです。船としての役割を終えた後も、防波堤としてしっかりと市民の安全を守っているのです。興味のある方は一度訪れてみては？

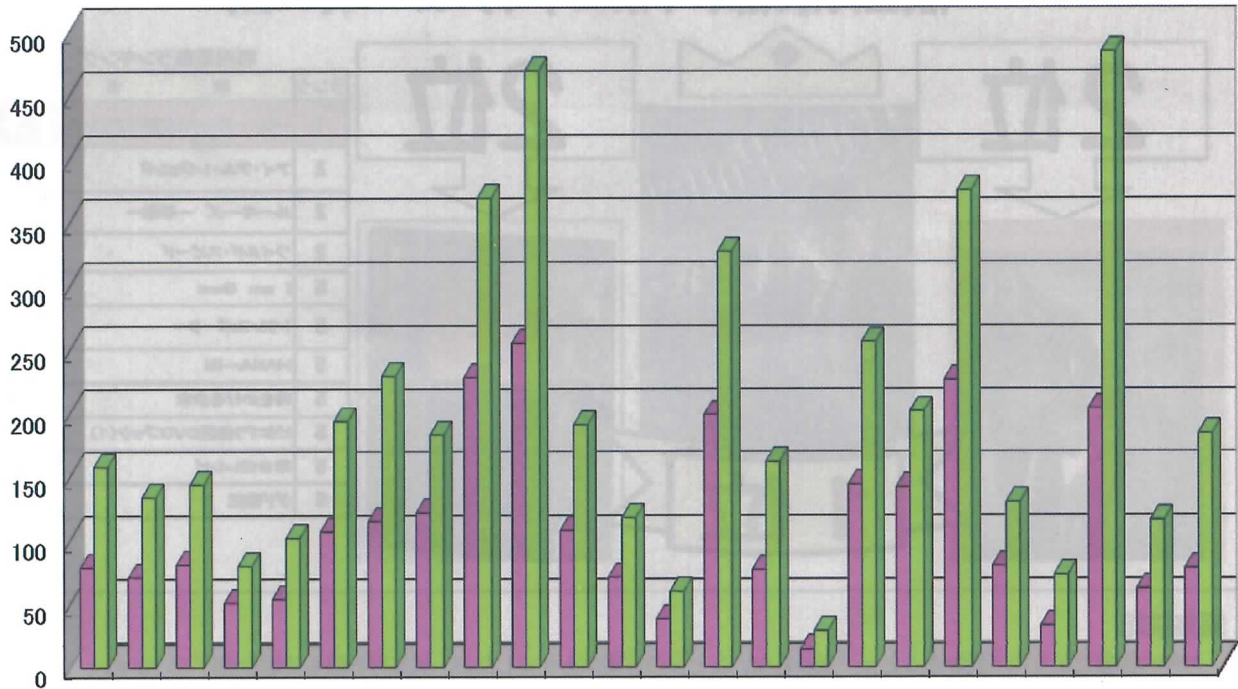
呉高専に在籍されている学生の皆さんにとって、専門の教科書を読んで学習することは避けて通ることはできません。しかし、専門書を読んでみても、内容を理解することはなかなか難しいでしょう。中には、専門科目にあまり興味を感じず、お悩み中の人も多いのではないのでしょうか？

本書は、コンクリートの歴史や技術を紹介する専門書です。しかし、決して一般的な専門書のように堅苦

お知らせ

平成21年度 図書館利用状況

■貸出人数  
■貸出冊数



学科学年																専攻科機電		専攻科建設						
	M1	M2	M3	M4	M5	E1	E2	E3	E4	E5	C1	C2	C3	C4	C5	A1	A2	A3	A4	A5	ME1	ME2	CA1	CA2
貸出人数	78	70	80	50	53	106	114	121	228	255	107	70	37	198	76	14	143	141	226	79	32	203	61	77
貸出冊数	157	133	143	79	101	193	229	182	369	469	190	117	59	327	161	28	256	201	375	129	72	484	115	183

# 貸出回数上位ベスト10

(調査対象期間:H22年4月1日~9月30日)

**2位**



**1位**



**3位**



順位	書名
1位	大学編入試験問題数学/徹底演習
2位	SPIテストセンター問題集完全版【2010】
3位	TOEICテスト新公式問題集
3位	TOEIC Bridge公式ガイド&問題集
5位	バカとテストと召喚獣 1
5位	バカとテストと召喚獣 3. 5
5位	バカとテストと召喚獣 2
5位	バカとテストと召喚獣 3
5位	新参者
10位	バカとテストと召喚獣 5
10位	バカとテストと召喚獣 4
10位	植物図鑑
10位	アバター

# DVD利用回数ランキング

(調査対象期間:平成22年4月1日~9月30日)

**2位**



**1位**



**2位**



利用回数ランキング		
ランク	題名	回数
1	ハリー・ポッターと謎のプリンス	5
2	アイ・アム・レジェンド	3
2	ルーキーズ 一卒業	3
2	ワイルド・スピード	3
5	I am Sam	2
5	トランスポーター	2
5	HANA-BI	2
5	時をかける少女	2
5	ピカゴフ陸軍DVDブック(1)	2
5	幸せのレシビ	2
5	ゲド戦記	2

## 編集後記

昨年の図書だよりに「変わること」、「変わらないこと」の言葉がありました。呉高専界限も変貌を遂げています。さて、皆さんはどのように「変わる」のでしょうか、あるいは「変わらない」のでしょうか。いろんな意味での「変身力」もあっていいのではないのでしょうか。遅くなりましたが、多くの方々のご協力により「図書だより」を発行することができました。最後になりましたが、ここに、厚くお礼申し上げます。